

## 第三部

### 各種研究会等における活動成果・研究成果の報告

- 1 森祥寛「ICTを活用したアクティブラーニングについて ～東京大学現代GP国際シンポジウム『ICTを活用したアクティブラーニング』への参加報告より～」、第182回共同学習会、2008年5月15日、金沢大学
- 2 鎌田康裕、末本哲雄、東昭孝、森祥寛、堀井祐介「学生・教員・職員間相互コミュニケーション促進を図るポータルシステムによるFD活動支援」、平成20年度全国大学IT活用教育方法研究発表会、2008年7月5日、東京
- 3 末本哲雄「教員FDアンケートの分析ー第1回ー」、第189回共同学習会、2008年7月10日、金沢大学
- 4 瀬川忍、松本豊司、佐藤正英、森祥寛、堀井祐介、鈴木恒雄「スキルアップ3講座の実践 一歩進んだPC活用講座を例として」、2008PCカンファレンス、2008年8月6日、慶應義塾大学藤沢キャンパス

～東京大学現代GP国際シンポジウム  
『ICTを活用したアクティブラーニング』への参加報告より～

## このシンポジウムは、

- ◎ 2008年3月17日、東京大学駒場キャンパスにて開催
- ◎ ICTを活用した新たな教養教育の実現-アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデルの構築-
  - 東京大学で平成19年度現代GPに採択
- ◎ 報告と成果発表
- ◎ アクティブラーニングの先進校の取組を紹介

## プログラム

1. TEAL (Technology Enable Active Learning) プロジェクト
  - MIT, Department of Physics, Senior Lecturer, Peter Dourmashkin
2. SCIL (Stanford Center for Innovations in Learning) と Wallenberg Hall
  - Stanford University, Academic Technology Specialist, Daniel Gilbert
3. 公立はこだて未来大学の取組み
  - 公立はこだて未来大学システム情報科学部 教授 美馬のゆり
4. KALSでのCritical Writing Program
  - 東京大学教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授 Tom Gally
5. 東京大学大学院 情報学環 福武ホールのデザイン
  - 東京大学大学院情報学環 准教授 山内 祐平
6. TabletPCを活用するeJournalPlus, MEET Video Explorer
  - 東京大学大学院総合教育研究センター マイクロソフト先進教育環境寄附研究部門 (MEET) 客員准教授 望月 俊男
7. パネルディスカッション
8. KALS(駒場アクティブラーニングスタジオ)見学会

## 内容の分類

- 1・2: アクティブラーニングに関する取組の紹介
- 3: アクティブラーニング的な要素を組み込んだ単科大学の紹介
- 4: 東大のアクティブラーニング用教室をつかった授業例
- 5: 新しいホールの紹介
- 6: 東大のアクティブラーニング用教室内で使われているソフトについての紹介
- 7: パネルディスカッション
- 8: 東大のアクティブラーニング用教室の見学

## アクティブラーニング? (1)

- ◎ 高校・大学の物理で、生徒が自分で考えて理解することを重視する
- ◎ 米国生まれの授業法
- ◎ 「物理教育国際会議」等で紹介

## アクティブラーニング？(2)

- ◎ 核物理の専門家だったメリーランド大のエドワード・レディッシュ教授らが、大学など教育現場での広範囲な実態調査を基に開発を続けている手法

## アクティブラーニング？(3)

- ◎ 従来の物理学の専門家主導で作られた物理教育の手法
  - 一般的な学生の多くが理解できない
  - 物理嫌いを作り出したとの反省から

教わる生徒の立場を重視するのが特徴

## アクティブラーニング？(4)

- ◎ この授業法は
  - 「学生の頭の中はまっさらではなく、頭の中には誤った予備知識や先入観が詰まっている」ことを前提に実施される
    - 高い所から同じ大きさのボールと金属球を落とした場合、
      - 「重い金属の方が先に落ちるのが『常識』！」と答える学生が多くいる現実を踏まえての授業

## アクティブラーニング？(5)

- ◎ 授業では、
  - それが誤りであることを学生自身に気付いてもらうことを目指す
- ◎ 教師は、学生が自分で気付くことができるようにガイドするのが役目
  - 教師が、概念や公式を丁寧に説明しても、理解は深まらない
  - 学生に意見を発表させる。
  - 学生同士で討議する時間を多く取って、自発的に考えを変えたり、深めるように導く。

## これによって...

- ◎ 確かに成果はあったとの報告でした
  - 落第率は落ちた

問題も存在する！

## いったい何が？(1)

- ◎ 同じ時間で、教えられる量が減る！
  - ただし、学生は、学び方を学んでいるので、以降は、自分で学習することが可能。

## いったい何が？(2)

- ◎ 文化的背景が、重要になる！
  - 授業等において、発言をし、議論をするという学び方をするような文化圏においては、非常に有効
  - しかし、積極的に発言を行わないような文化圏においては...
    - 自身の考えを述べない
    - そもそも議論が起こりづらい
- 等で、手法そのものの有効性に疑問？

## いったい何が？(3)

- ◎ 教室における机や黒板、プロジェクターの配置等に工夫が必要。
  - 専門の教室をつくるのであれば費用がかかる。
  - 何もない部屋で、車座になって、ディスカッションによって学ぶのであれば費用はかからない？
    - 日本の学生相手に、そのような授業形態が有効となるか？

## アクティブラーニングの教室(1)



東大のアクティブラーニング用教室「KALS」  
◎中央に教卓  
◎四方にスクリーンを配置

## アクティブラーニングの教室(2)



勾玉型の机  
授業の内容に合わせて再配置

タブレットPCを活用

## おれ、おれ！ 俺だよ！ 俺！！

- ◎ と、というような積極的な態度が美德とされるような状況でないとう効果がない？
- ◎ 日本において、この手法を取り入れるためには？

授業の前段階における、  
準備が必要！

## 調べてみると...

- ◎ 日本においては、
  - 企業研修
  - コンサルティングなどで比較的多く、用いられているらしい。

## それで、どうする？(1)

- ◎ 金沢大学の教育に導入可能か？
  - ゼミや輪講等はアクティブラーニング？
- ◎ 海外ではFD研修に使われている。
  - 研修に参加している教員に、課題などを与え、教員間で議論させる？
  - 場合によっては、こちらにアクティブラーニングを導入してみるか？

## それで、どうする？(2)

- ◎ アクティブ・ラーニング導入の実践的課題
  - 溝上慎一（京都大学）
  - 名古屋高等教育研究 第7号（2007）
- 以降の内容は、上記論文から引用

# 学生・教員・職員間相互コミュニケーション促進を図る

## ポータルシステムによるFD活動支援

鎌田康裕<sup>1)3)</sup>・末本 哲雄<sup>1)3)</sup>・東 昭孝<sup>1)3)</sup>・森 祥寛<sup>1)2)</sup>・堀井 祐介<sup>1)3)</sup>

1)金沢大学 大学教育開発・支援センター

2)金沢大学 学生部学務課 3)FD・ICT 教育推進室

〒920-1192 石川県金沢市角間町 共通教育1号館

TEL : 076-264-5804 FAX : 076-264-5999

kamada@el.kanazawa-u.ac.jp

### 1. はじめに

金沢大学では平成18年度より学習管理システムと連動したポータルサイトを運用している。また、同時期に始まった新入生のPC必携化から3年目を経ち、4年生・大学院生も研究活動等のためにPCを所有しているという状況から、学生のほぼ全員にPCが行き渡ったと言えるようになった。そうした環境により、インターネットに接続すれば常時ポータルへのアクセスも容易となった。

ポータルシステムを使えば、教員は受講生に一斉メールを送ることができるほか、講義室の変更や、休講通知なども全てひとつの場所で通知できる。メールには確認したかどうかのチェック機能が付加されており、教員からの学生への確実な情報伝達が可能である。学習面では各講義資料の閲覧・配布、課題の受け取り等に利用可能である。

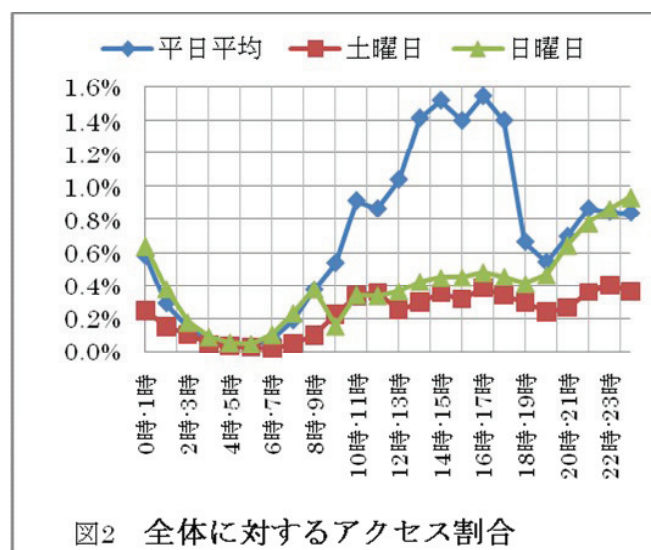


図2 全体に対するアクセス割合

図1は、ポータルへの時間別アクセスの年度比較である。2006年度運用より2008年度にかけて緩やかにだが夜間に移行してきている。また、日曜の夜のアクセス数も、平日と同程度、もしくはそれ以上の割合を示している(図2)。よって、学生の正課外時間での学習を促すコンテンツの開発は、学習支援として有用だと考えられる。しかし、コンテンツの開発およびポータルの活用は教員のPCスキルに依存しているため、全学的に利用されているとはいえない。

そこで、本研究では教員によるポータルシステムの活用促進をFD活動の一環と捉え、その実践の提案例を報告する。

### 2. ポータル利用の教員支援

各教員には、授業で担当している学生に対して、可能な限りポータル上で事前に資料を公開することを検討してもらった。そのために操作手順など

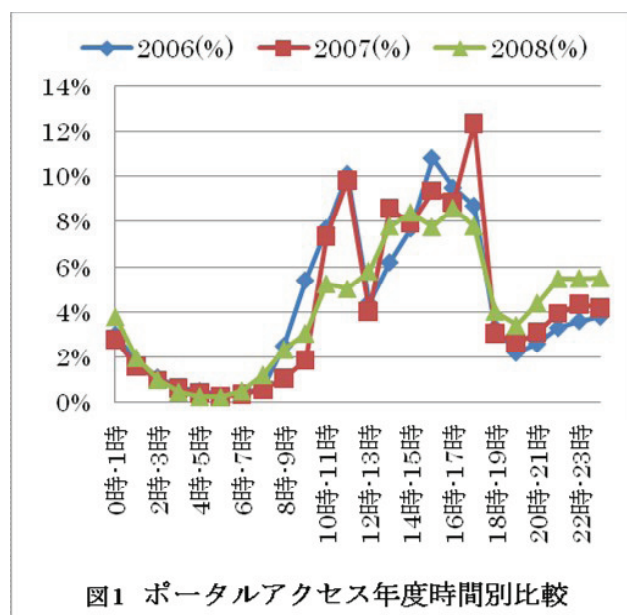


図1 ポータルアクセス年度時間別比較

の開設を要する教員にはFD・ICT教育推進室より個別訪問指導を行った。(昨年度までは各部局などグループでのポータルシステム利用研修会を行っていたが、教員各々の授業内容や目的があるため、ポータルシステムの利便性がわかりにくく、使用してもらえなかった。)ある教員によると、「グループ研究では全く理解できないが、個別訪問によって自らが必要とする部分を集中的に取り組み」との感想が得られ、積極的な利用を促すことに成功している。一度、使用を始めれば、資料やテストなどはそのままデータとしてシステム上に残ることになり、次の学期以降に簡単に移行できるメリットもある。これは教員の負担を軽減するという意味でも効果があると考えられる。さらに幾らかの補正を加えることで学生の自己学習用教材にすることも可能となる。

### 3. ポータルを利用した学生の相互学習

図1,図2で示した通り、夜間のアクセスが多くなっている。そこで学生がその日の授業内容や課題で分かりにくい箇所を相互に相談できる場所が必要だと考え、ポータル上に学生相互相談所を設置した。

ここは学生が自由に書き込みできる掲示板のほか、メール機能や資料のアップ・ダウンロードが可能である。学生同士で行き詰っている問題を相談したり、大学院生が補足として学習すべき点をアドバイスしたりできる。また必要であれば教員もアドバイザーとして参加できる。

実際にあったやりとりとして、大学院生の学会報告用資料を学部生に見せ、デザインや読みやすさに対して意見を求めることもあった。これは下級生から上級生に対する質問だけでなく、上級生から下級生に問いかけが発生しており、双方向の学習が形成されている。大学院生の研究に直に触れることで下級生の研究に対する意識への刺激となる効果も期待できる。

他には、共通科目として開講されている日本国憲法に関してふと思いついたことを気軽に質問しているケースもあった。そこでは憲法に関する話

を実例やマンガ・アニメなどのシーンも参考にどう解釈すればいいかという自由な発想によって議論が進んでいた。

### 4. 課題と展望

現在の利用状況として授業単位のものも多く、このようにゼミやその他のグループ(ex.学内のボランティアグループ、ピアカウンセリンググループなど)による使用例はまだまだ少数である。しかし、学生による自主ゼミなど実際に時間をとって指導するには負担が大きいのが、ポータルシステムを利用することで時間を気にせず補足することができる。教師による誘導によって、授業前に学習もしくは少しでもその問題に触れてほしいという意図をポータルシステムによって達成することができるのではないだろうか。

しかし全教員のフォローを行うのは時間的にも人力的にも難しいことであり、その点をフォローするものとしてマニュアル作りを進めなければならない。PC作業については紙面によるマニュアルでは分かりにくい教員もいる。今後はPC作業に抵抗がある教員には動画マニュアルなどを作成し、より積極的なポータル利用を促していくつもりである。

PC使用のレベルに応じた個別対応をさらに進め、講義のみならず、職員間の会議資料の配布、連絡事項の掲載なども進めていく。現在、ポータルの使用はほとんど学務系の職員に限定されている。将来的にはその他の職員の参加を促し、学生・教員・職員三者間での相互コミュニケーションをさらに深めていく。そして従来のFDを超えて、学習支援だけでなく課外活動や就職支援等学生生活全般における支援の向上を目指していく予定である。

第189回 共同学習会  
2008年 7月 10日

**第1回 教員FDアンケートの分析**  
— 特にFD関連項目について —

末本 哲雄  
(大学教育開発・支援センター)

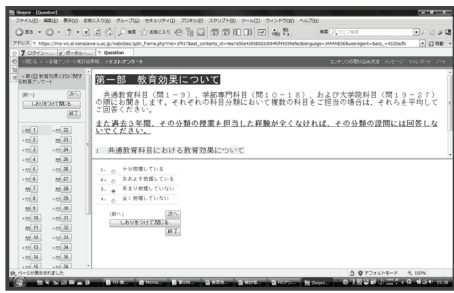
〈内容〉 FDアンケート集計結果の報告

[ I ] アンケートについて・・・ (3分)  
(a) 背景・目的  
(b) 設問の構成

[ II ] FD関連の集計結果・・・ (15分)  
(a) 6問分の結果

[ I ] FDアンケートについて

2008年 1/25～2/7、WebClass上で実施



(a) 背景・目的

3学域  
16学類

2008年度

組織的FDの義務化

FD: 教育力向上の取組み (Faculty Development)

【背景】 学士課程での**組織的FD義務化**、および3学域16学類に向けて

①人材育成目的に合致した教育成果が得られているかどうか  
②本学において必要なFDとは何か


を検討することを目的に実施した。

まずは御礼・・・

【対象】 金沢大学の全教員1032名に依頼し、  
302名より回答を得た (回答率: 29.2%)

Q34. 所属部局

(有効回答として)



58 ■ 大学院自然科学研究科(基礎系「理」)

11 ■ 医学部附属病院



(b) 設問の構成 (全41問)

- 1部 (Q1-27) …… 授業科目  
(目標の達成度や位置づけの印象など)
- 2部 (Q28-33) …… FD関連  
(FD活動の参加頻度や役立ち具合の印象) ← 発表の対象
- 3部 (Q34-40) …… 先生方  
(所属や講義のコマ数)

▪ Q41 …… 自由記述

7

[Ⅱ] アンケートの集計結果 … (15分)

FD関連 6問 (Q28~33)

8

(1)

Q28. 自身の授業科目において、  
授業内容および授業方法の改善を、  
どのように試みてきましたか。(複数回答可)

→ 総数として集計

9

自身の授業科目において、授業内容および授業方法の改善を、どのように試みてきましたか。  
(複数回答可) (Q28)

10

(2)

Q29. 前問で回答した試みが、  
教育効果の向上に結びついたと思いますか。

→ 各学部+総数として集計

11

Q28で回答した試みが、教育効果の向上に結びついたと思いますか。(Q29)

12

(3)

Q30.学生による授業アンケート(評価)が、  
教育効果を向上させるために一般的に  
役立っていると思いますか。

→ 各学部+総数として集計

13

学生による授業アンケート(評価)が、教育効果を向上させるために一般的に役立っていると思  
いますか。(Q30)

14

(4)

Q31.これまで本学(全学または各部局)において  
実施されたFDにどの程度参加してきましたか。

→ 各学部+総数として集計

15

これまで本学(全学または各部局)において実施されたFDにどの程度参加してきましたか。(Q31)

16

(5)

Q32.これまで参加した本学のFDが、自らの授業の  
内容・方法の改善のためにどの程度役立ったと  
思いますか。

→ 各学部+総数として集計

17

これまで参加した本学のFDが、自らの授業の内容・方法の改善のためにどの程度役立ったと思  
いますか。(Q32)

18

(6)

Q33.教育効果を高めるために、本学において今後、  
どのようなFD活動を行えばよいと思いますか。  
(複数回答可)

→ 総数として集計

19

教育効果を高めるために、本学において今後、どのようなFD活動を行えばよいと思いますか。  
(複数回答可)。(Q33)

20

教育効果を高めるために、本学において今後、どのようなFD活動を行えばよいと思いますか。  
(複数回答可)。(Q33)

Indiv.=257

→  
続き

21

教育効果を高めるために、本学において今後、どのようなFD活動を行えばよいと思いますか。  
(複数回答可)。(Q33)

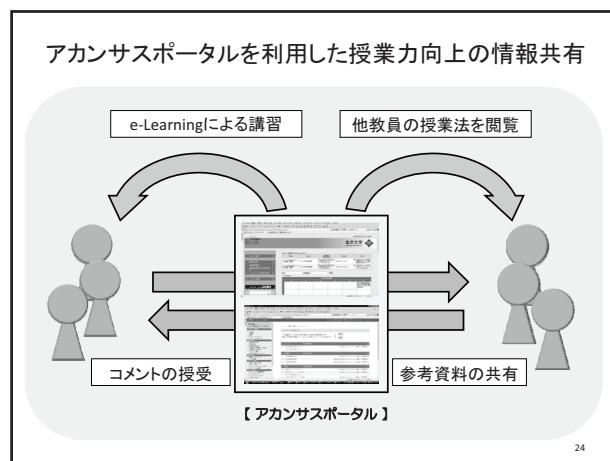
Indiv.=257

22

**結果の集約**

- 教員の半数以上は、授業アンケート、学生の意見、教科書・資料の再検討によって、授業改善を試みている(Q28)
- 学内のFD活動に、半数の教員は「時間が許す限り+だいたい」参加している(Q31)
- 今後行っていきたいFD活動のトップは「授業方法の改善を目的とした講習会」(Q33)
- FD活動として、「授業のやり方」の向上に関心が高い(Q33)

23



# 授業のやり方を共有しよう

各学部の回答者数と教員数	回答者	教員数*
文学部	21	63
教育学部	30	81
法学部	11	32
経済学部	11	38
大学院医学系研究科	17	223
大学院医学系研究科(保健学専攻)	30	
医学部附属病院	4	129
大学院自然科学研究科(基礎系「理」)	30	
大学院自然科学研究科(生命系「薬」)	19	321
大学院自然科学研究科(応用系「工」)	58	
大学院法務研究科	4	16
大学院人間社会環境研究科、その他	33	126
合計	268	1032

\*平成19年5月1日現在

本学における教育の目的・目標を、どの程度把握していますか。(Q1, 10, 19)

共通教育科目  
学部教育科目  
大学院教育科目

担当授業科目を含むカリキュラムは、本学における教育目的・目標を達成していく上で、系統的かつ充実した内容になっていると思いますか。(Q2, 11, 20)

共通教育科目  
学部教育科目  
大学院教育科目

担当授業科目の到達目標(シラバスに「授業の目標」として記載のもの)は、当該授業科目を含むカリキュラムの目的・目標と整合していると思いますか。(Q3, 12, 21)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

31

担当授業科目の内容・レベルの、当該授業科目を含むカリキュラム上の位置づけについて、どの程度把握していますか。(Q4, 13, 22)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

32

担当授業科目のカリキュラム上の内容・レベルに即して、当該授業科目の内容を組み立て、これを適切な方法で実践していると思いますか。(Q5, 14, 23)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

33

担当授業科目の到達目標(シラバスに「学生の学習目標」として記載のもの)を、受講生たちは全体として、どの程度、達成していると思いますか。(Q6, 15, 24)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

34

何を根拠にして、そのように判断していますか(複数回答可)。(Q7, 16, 25)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

35

担当授業科目において、成績評価・単位認定を行うにあたり、当該学生の学習目標達成(シラバス記載のもの)の度合いが、当該授業科目の到達目標との関連においてどれだけの水準にあるかの検証を行っていますか。(Q8, 17, 26)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

36

到達目標が達成されない理由は、主に何であると思いますか(複数回答可)。(Q9, 18, 27)

共通教育科目

学部教育科目

大学院教育科目

37

# スキルアップ3講座の実践

## 「一歩進んだPC活用講座」を例として

瀬川 忍<sup>1)</sup>, 松本 豊司<sup>2)</sup>, 佐藤 正英<sup>2)</sup>, 森 祥寛<sup>1)</sup>, 堀井 祐介<sup>1),3)</sup>, 鈴木 恒雄<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>金沢大学 FD・ICT 教育推進室、<sup>2)</sup>金沢大学 総合メディア基盤センター

<sup>3)</sup>金沢大学 大学教育開発・支援センター

segawa@el.kanazawa-u.ac.jp

keyword : スキルアップ/グループ制作/e-Learning/インターンシップ

### 1. はじめに

近年の急速な技術革新によるハードウェアの高性能・低価格化、ソフトウェアの適用範囲拡大により、ICTの適応範囲が拡大し、いまや情報通信システムは社会生活の基盤として不可欠なものになっている。しかし、(社)日本経済団体連合会の提言「高度情報通信人材育成の加速化に向けて—ナショナルセンター構想の提案—」によれば、産業界が求める人材と大学から輩出される人材の間はギャップがあり、量・質の両面で不足しており、高度ICT人材の育成にいち早く着手したアジアや欧米諸国に遅れていることが指摘されている。

金沢大学では2006年から新生にノートPCの必須化を実施し、社会が求めるPC技術者の養成を目指しているが、PCを用いた科目数はまだ不十分である。そこで、2007年度よりPCスキルの技術力向上を目的とした「一歩進んだPC活用講座」を開講したところ、定員以上の受講希望があったほか、講義後のアンケート調査により、82%の学生から「非常に良かった」「良かった」と高い評価を得た。また、講師陣の目標以上の技術を習得した学生が多数であったことから、2008年度は「PCスキルアップ3講座」として、「一歩進んだPC活用講座」、「情報発信リテラシー」、「ICT素材作成術」を開講予定である。本稿では、特に、2008年度の「一歩進んだPC活用講座」の実践について発表する。

### 2. 講義計画

講義概要を表1に示す。「一歩進んだPC活用講座」は総合メディア基盤センターの情報教育部門と、FD・ICT教育推進室のICT教材作成部門が中心に講義を実施している。講義計画では予めコンピテンシーを作成し、到達目標を定めた。

表1 講義計画

回	講義概要
1	アカンサスポータルの使い方 Officeの便利機能 その1
2	Officeの便利機能 その2
3	IT社会の著作権 Power Pointの活用法
4	Publisher 名刺と履歴書
5	Publisher ポスターとパンフレット
6	Excelの活用法(統計と関数) 圧縮・解凍、ブラインドタイピングなど
7	ショートカットキー Officeでホームページ作成 ハイパーリンクの活用
8	Access その1 データベースの活用法
9	Access その2 テーブルとフォーム
10	Access その3 クエリとラベル データのエクспорт
11	グループ実習
12	グループ実習
13	グループ実習
14	グループ発表

この講義では、一般的な情報処理の講義で学習しないOfficeの便利機能のほか、金沢大学が学生に推奨しているPCに標準装備されているMicrosoft Office Professionalの中からPublisherやAccessといったアプリケーションの基本的な使い方も教えている。また、学生から学びたいことを募集し教える時間を第6、7回に設けた。さらに、金沢大学では学習管理システムWebClassを用いたアカンサスポータルを、出席確認、講義資料配布、課題提出、教員と学生の連絡、自宅学習などに利用し、日々、PCを使う機会を増やしている。

### 3. 講義実践の工夫

本講義では、対面講義と演習を組み合わせて指導している。講義は、教員と教務補佐員が指導を担当し、講義サポーターとして FD・ICT 教育推進室から 2名のスタッフと、講義内容のスキルを習得した学生 2名をアルバイトとして雇用している。また、学生アルバイトは講義前に講義内容の説明と実技の練習を実施している。

主な講義内容は、Office の簡便な作図機能を用いたイラストやロゴの描画、オリジナルデザインの手法などのほか、より分かりやすい学会発表の方法、レポートのまとめ方などを、できるだけ具体的な例を用いて学習する。Publisher では、社会で役に立つ印刷物、例えば、名刺、履歴書、ポスター、3つ折パンフレットなどの作成方法や、DTP 版下の作成方法を実習する。Access では、データベースとはどういうものであるかを、年金問題や情報漏洩など、社会問題を例に説明し、具体的なデータベースのデザインや編集、特定のデータ抽出後の Excel への書き出しやグラフの作成、印刷物フォームの作成と差し込み印刷などを中心に行っている。また、各アプリケーションの特徴、各々のアプリケーションの関連性や、効率よい作業計画・手法なども教えている。このほか、Office の Word、Power Point による web ページ作成方法やサイトの設計、ハイパーリンクの設定などを学習する。また、毎回、各回で学んだ技術を用いた課題提出もある。

さらに、講義終盤にはグループ実習として、4~5人のグループがそれぞれテーマを設定し、これまで学んだ機能を活かした作品制作と発表を行う。グループ制作は、お互いのスキル向上と協調性の育成を目的としており、テーマに基づく作品の企画から制作、さらに編集といった作業そのものの設計から、それぞれの作業を誰が担当するかなどを一つのプロジェクトとして実践する。最終回では、各グループが作品を紹介するプレゼンテーションを実施するが、この発表会は、教職員だけでなく、受講生たちも評価や審査に加わることが特徴である。

なお、FD・ICT 教育推進室では、スキルアップ 3 講座を習得した学生の中から、学んだスキルを活かすアルバイトの希望者を募り、ICT 教材作成やサーバー開発・管理などの作業に、約 60 名を雇用している。大学には ICT を活用した業務が多数あり、さながら、大学という職場でのインターンシップである。アルバイトの学生は作業を通じて、さらにスキルを向上させている。

### 4. 成果と課題

講義では毎回、オリジナル作品を提出することを課題としたが、提出された作品はどれも教えた以上の機能を用いていた。ICT 教材作成やサーバー管理等の作業に雇用した学生は、ICT 教材の改善や、情報教育環境の整備にも貢献している。

前期の講義は当初 2 年生以上を対象と考えており Office2003 の講義資料を準備したが、実際の受講生は 1 年~3 年であったため、急遽 Office2007 の講義資料の準備が必要であった。また、Office2003 と Office2007 では操作性や機能はかなり異なるため、講師側が混乱することもあった。さらに、学生の PC スキル習得度に格差があり、講義中盤で進め方を再考したことから、今後、講義の前提条件を説明するとき、PC の習得度について詳しく説明する必要がある。



図1 オートシェイプとワードアートで作成したロゴ

### 5. まとめ

スキルアップ 3 講座は、社会が求める PC 技術者の養成を目指しており、1 年生から受講できる。「一歩進んだ PC 活用講座」では、一般的な情報教育で学ばない Office の便利機能やアプリケーションを中心に学習する。また、近年、Word、Excel、Power Point を習得している学生は多いが、本講義では、Publisher、Access、ホームページの作り方など、学生生活だけでなく、就職活動や社会で役立つアプリケーションも学習する。講義中盤までの作品を評価したところ、講師陣の計画以上の習得度が得られた。(図 1 参照) また、講義を受講した学生の中から学生アルバイトを雇用しているが、学生は大学の仕事を通じてインターンシップを経験している。

### 参考文献

(1)松本豊司：グループ学習と相互評価を取り入れた授業の設計とその実践，平成 20 年度全国大学 IT 活用教育方法研究発表会，D-3，2008